

電車内痴漢の環境要因が被害後の通報・相談・対処行動に与える影響

研究代表者

東洋大学大学院 大高実奈

1. まえがき

1-1.痴漢の定義と発生状況

東京都迷惑防止条例では、第 5 条に「何人も、正当な理由なく、人を著しく羞恥させ、又は人に不安を覚えさせるような行為であって、次に掲げるものをしてはならない」と記され、第 1 項として「公共の場所又は公共の乗物において、衣服その他の身に着ける物の上から又は直接に人の身体に触れること」が禁止されている。また、警視庁 (2024) によると 2023 年中の迷惑防止条例違反 (卑わい行為) は約 1,900 件検挙され、その発生場所として電車内が 32%を占め、発生時間帯として通勤通学時間帯の午前 7 時～9 時、午後 5 時～7 時に多く発生している。このことから、通勤通学ラッシュおよび帰宅ラッシュの時間帯に、電車内で多くの痴漢被害が発生していることがわかる。

1-2.痴漢の被害実態調査

日本国内では、これまでに痴漢に関する被害調査がいくつか行われてきた。鈴木 (2000) は痴漢を「男性が、見ず知らずの女性の身体に、意図的に触れる行為」と定義し、愛知県内に居住する 18～29 歳の女性を対象として被害実態調査を行った。その結果、全体の 33.7%が過去 3 年間で被害に遭っており、年齢が若いほど経験者の割合が高いことを示した。鈴木 (2000) の調査では被害場所を限定せず調査していたが、その被害場所としては「電車、バスの中」が被害総数のうち 66.5%と最も多く、「駅の構内」が 3.8%であった。岡部 (2004) では福岡県久留米市の西鉄久留米駅において乗客に聞き取り調査を実施し、女性客の 28.4%(48 人)が電車内で痴漢されたことがあると回答している。また、その被害内容としては「服の上から触られた」24 人、「体を押し付けられた」が 9 人 (上半身 4 人、下半身 15 人)、「衣服の中に手を入れられた」が 1 人であった。警察庁 (2011) では、東京・名古屋・大阪の大都市圏に居住し、通勤や通学で電車を利用する 16 歳以上の男女を対象とした調査を行った。その結果、女性のうち過去 1 年間で痴漢被害に遭った人は 13.7%であり、被害の内容としては「自分の体を触られた」が 84.5%、「痴漢に体を押し付けられた」が 48.7%であった。浅野他 (2011) は都内の 20 歳以上の大学生を対象に痴漢被害の実態調査を行い、全体の 37.0%(男性の 5.6%、女性の 49.5%)

が被害経験を有していた。京都府警察 (2015) は、京都府内の女子高校生 367 名を対象にアンケートを行い、24.5%が痴漢等の被害に遭ったことがあると回答している。同じく都道府県警察の調査として、埼玉県警察 (2020) は県内の高校生、大学生、社会人の女性 1,754 名を対象として調査を行い、そのうち 21.0%が被害に遭ったことがあると回答していた。大高 (2017) は東京都内の大学生男女を対象に行った調査で、男性の 5.97%、女性の 37.39%が電車内での痴漢被害の経験を有すると明らかにした。また、被害内容は「臀部を触る」が 37 件、「押しつけ」が 22 件、「脚を触る」が 20 件、「胸部を触る」が 7 件、「スカートをめくる」が 4 件、「息を吹きかける」が 3 件であった。

東京都 (2023) は都内に在住・在勤・在学の 16~39 歳を対象に調査を行った。それによると、ここ 1 年の被害が「ある」と回答したのは 4.4%、「確証はないがおそらくある」と回答したのは 3.9%、それ以前の被害が「ある」と回答したのは 19.4%、「確証はないがおそらくある」と回答したのは 8.8%であった。電車内で被害に遭ったのは直近の被害では 81.2%、ここ 1 年の被害では 84.1%、それ以前の被害では 85.6%であった。電車内痴漢被害経験のある参加者の性別は「男性」が 9.4%、「女性」が 89.7%、「ノンバイナリー/X ジェンダー」が 0.9%であり、年齢としては、「19 歳以下」11.3%、「20~24 歳」28.3%、「25~29 歳」18.5%、「30~34 歳」19.9%、「35~39 歳」21.9%であった。被害内容としては「衣服越しに体を触られた」が 63.6%、「体を密着された」が 40.6%、「衣服の下から体を触られた (直接接触された)」が 11.1%となっていた。

1-3.痴漢被害の通報・相談行動

被害の実態調査を行った研究の一部では、被害後の通報や相談行動についても調査したものがあある。鈴木 (2000) の調査では被害を届け出た件数としては 3.2%であり、届け出先としては警察が 13 名と最も多く、交通機関の乗務員が 4 名、交通機関の乗務員以外の職員が 1 名であった。届け出た理由としては、「同じ犯罪が繰り返されないようにと思ったから」が 10 名と最も多く、「犯人を処罰してもらいたいから」と「そうしないと気持ちが治まらなかったから」が 8 名、「犯罪は届け出るべきだと思ったから」が 4 名であった。「届け出なかった」理由としては、「大したこと (被害) ではなかったから」が 54.4%と最も多く、「誰がやったかはっきりしなかったから」と「届け出ても意味や効果がないと思ったから」が 32.8%、「届け出るのが面倒だったから」が 22.2%、「届け出る時間的余裕がなかったから」が 21.5%であった。また、身近な人への相談であれば、相談相手として「友人」は 84.7%、「母親」は 42.6%、「恋人」は 31.7%、「父親」は 15.3%、「姉妹」は 14.4%であり、友人や恋人、家族に相談する人が多いことがうかがえる。

岡部 (2004) の調査では届出をしたのは 2.1%であり、届け出なかった理由としては、「面倒くさい」が 9 名と最も多く、「時間に余裕がない」が 8 名、「恥ずかしい」4 名、「犯罪だと思わなかったから」3 名、「仕返しが怖い」2 名であった。届け出の手続きの煩雑さが理由として多く、羞恥心や報復への恐れも挙げられている。

警察庁 (2011) では「警察に通報した、又は警察に相談した」のは 10.9%となっていた。その理由としては、「警察沙汰になるのは面倒だから」が 30.6%、「事情聴取等に時間がかかりそうだから」が 26.6%、「犯人が捕まらないと思うから」が 20.3%等、警察の対応に期待が持てない気持ちを反映した回答が多く、その他「二次被害を受けそうだから」が 10.7%、「警察官に話すのが恥ずかしいから」が 5.2%と報復や二次被害、羞恥心から通報をためられる気持ちを反映した回答もあった。また、埼玉県警察 (2020) の調査では通報率は 13.6%であった。

東京都 (2023) の調査では、被害直後や、被害のしばらく後での届け出・連絡・相談先についても調査している。被害直後の届け出・連絡・相談先として、「警察」が 3.7%、「駅職員」が 6.2%であり、それ以外では「恋人・友人・知人」が 21.0%、「家族」が 13.5%であった。その一方で「相談機関」への相談は 1.7%、「被害直後は誰にも連絡していない」との回答は電車内で 62.4%であった。しばらく後での届け出・連絡・相談先については、「警察」が 3.3%、「駅職員」が 3.7%であり、それ以外では「恋人・友人・知人」が 15.1%、「家族」が 9.9%であった。身近な人へ相談している一方で、「相談機関」へは電車内で 1.7%、「被害のしばらく後は誰にも連絡などしていない」という回答も 71.3%あった。被害直後に本当はどうしたかったのかについては、「気軽に届け出る・連絡する方法があれば何かしたかった」が 21.7%、「警察に届け出たかった」が 13.4%、「駅職員に届け出たかった」が 12.3%であった他、「特に何もしたくなかった」という回答も 58.1%と多い。被害の直後に届け出・連絡・相談をしなかった理由としては、「めんどうだったから」が 46.2%、「時間がなかったから (遅刻など)」が 28.6%、「痴漢か確信が持てなかった/勘違いだったら恥ずかしい」が 19.2%、「犯人が捕まらないと思ったから」が 19.1%、「大したことではなかったから」が 15.9%、「家族などに心配を掛けなくなかったから」が 15.0%、「恥ずかしかったから」が 14.0%、「ショックで何も考えられなかったから」が 13.6%、「他人に知られたくなかったから」が 12.7%であった。届け出や連絡の手続きの煩雑さに起因する理由が最も多く、被害内容の軽微さやあいまいさ、羞恥心や周りに知られたくないといった気持ちも届け出や連絡・相談を抑制していることがうかがえる。

1-4.痴漢被害時の対処行動

被害後の通報・相談行動だけでなく、被害時の被害者自身による対処行動について調査したものもある。岡部 (2004) では、通報以外の被害時の対応として、「手で払いのけた」が 8 名、「カバン等で防いだ」が 7 名、「場所を移動した」と「身をよじって逃げた」が 6 名、「足を踏んだ」が 3 名と何らかの行動をとれる人も多いが、「何もできなかった」と回答した人も 7 名いた。警察庁 (2011) の調査では、痴漢に遭った時の行動として、「我慢した」が 52.6%と最も多く、「その場から逃げた」は 45.1%、「犯人に対して何らかの行動を起こした」は 27.0%であった。大高 (2017) では被害時の何らかの対処行

動について、被害時に「怒り」を感じるほど行動もとれることが示唆されている。被害時の気持ちや状態については東京都 (2023) も調査しており、電車内痴漢被害に遭った者のうち、「驚いた」は 53.8%、「怖かった」は 45.4%のほか、「怒りを感じた/反撃したいと思った」との回答は 30.7%である。そのほか、「身体が動かなかった・声が出なかった」といった凍りつき反応に関する回答については 22.6%、「自分がどこか遠くにいる感じがした」という解離や離人感のような状態は 2.8%が感じていた。

東京都 (2023) の調査では被害時の被害者自身の行動についても調査しており、「我慢した・なにもできなかった」が 40.7%と最も多いものの、「逃げた・移動した」が 20.8%、「身体を動かして加害者（痴漢）を止めようとした」が 17.6%、「持ち物でブロックした」が 14.3%、「加害者（痴漢）をにらんだ」が 12.7%となっている。駅構内の被害では「我慢した・なにもできなかった」は 24.6%で、「逃げた・移動した」が 37.7%、「持ち物でブロックした」が 15.5%、「加害者（痴漢）をにらんだ」が 15.0%となっている。

2. 目的

先行調査より、電車内で痴漢に遭った際に「届け出をしない（できない）理由」について、届け出の煩雑さや時間的余裕のなさのほか、痴漢行為のあいまいさや軽微さ、混雑した電車内での犯人の同定の難しさなど、様々な要因があるとの示唆が与えられた。しかし、実態調査によって被害後の通報・相談行動について尋ねても、被害時の状況はそれぞれの被害によってさまざまであり統制することが難しく、実際にそのような要因によって被害申告が抑制されるかどうか検討した研究はない。本研究では場面想定法により、電車内痴漢被害時の状況要因の異なる電車内痴漢シナリオを用いて、シナリオのような被害に遭った際に被害申告が抑制されるかどうか検討する。

さらに、先行研究から、加害者の方を振り返ったり、体をよじったり持ち物を利用したりして犯行を中止させようとしたり、場所を移動しようとするなどの何らかの対処行動については、多くの被害者がとっていることがわかっている。電車内痴漢被害時の状況要因によって、被害の届け出や被害時の対処行動の生起が異なるか検討する。また、大高 (2017) の調査結果より、被害時の対処行動については、被害時の気分が影響していることが示唆されており、被害時の状況要因と併せて、対処行動に関連を持っている可能性が考えられる。被害時の気分も測定することで、同じ被害条件においても、対処行動をとれるかどうかと気分との関連について検討する。また、被害時の気分以外にも参加者のもともとのパーソナリティの影響も考えられるため、Big5 も測定する。

調査対象者としては、先行研究からも「若い女性」での被害が多いとわかること、電車内での痴漢被害に限定して調査を行うため、電車の利用者が多く、車内が混雑している地域として、大都市圏に居住している人に限定し、このような電車の混雑状況を想像しやすい、日常的に電車を利用した経験のある人を対象とする。

3. 方法

3-1. スクリーニング

本研究では、インターネット調査会社を利用し、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県、愛知県・京都府・大阪府・兵庫県に在住の18～39歳の女性を対象とした調査を行った。まず、スクリーニング調査として、10,000名を対象にweb調査を行い、電車通学や電車通勤の経験とその都道府県、電車内で体を触られる被害やその他の性被害の経験を尋ねた。スクリーニング調査の配布においては年齢による割付をし、18～19歳1,000名、20～24歳2,500名、25～29歳2,500名、30～34歳2,000名、35～39歳2,000名から回答を得た。年代によって割付人数に差について、なるべく若年の参加者を多く集めたいことと、登録者数の年代別人数比により、回収率を確保するための調整をとして割付人数を決定した。スクリーニングの結果、電車内痴漢やその他の性被害経験について、電車内で体を触られる被害経験が1回以上ある者は33.1%、電車以外で体を触られる被害経験が1回以上ある者は26.9%、盗撮やのぞき、露出狂などその他の性被害を経験が1回以上ある者は31.4%であった (Table 1)。

Table 1

スクリーニング回答者の性被害経験

	電車内で 体を触られる	電車以外で 体を触られる	その他の 性被害
まったくない	5,890	6,566	6,073
1~2回ある	2,438	2,070	2,400
それ以上ある	871	616	774
わからない	801	748	753
1回以上ある	3,309	2,686	3,174

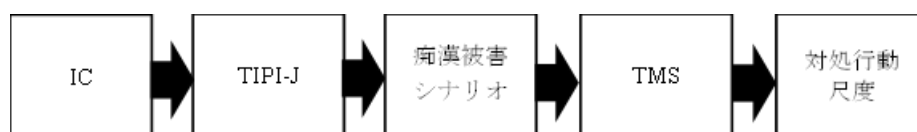
3-2. 本調査

スクリーニング結果をもとに、通学や通勤で1年以上電車を利用した経験があり、その地域に上述の都道府県が含まれている者を選出した。抽出した対象者を「電車内痴漢被害の経験が多い者(それ以上と回答)」、「電車内痴漢被害の経験が少ない者(1~2回あると回答)」、「電車内痴漢以外の性被害経験のみがある者(電車内痴漢被害はまったくないと回答し、電車以外で体を触られる被害、その他の性被害のいずれかに1~2回又はそれ以上あると回答した者)」、「被害経験のない者(いずれもまったくないと回答した者)」に分けた。8条件で被害経験のある者とない者、被害回数が多い者と少ない者の人数、居住地や年齢が均等になるように割付し、4,000名(500名×8条件)から回答を得た。本調査の流れをFigure 1に示す。まずBig5の尺度に回答し、痴漢被害のシナリオを読

み、自分がそのような被害に遭ったと想定したうえでその時の気分とどのような行動をとるかに回答するという流れであった。Big 5 は 10 項目 7 件法の日本語版 Ten Item Personality Inventory (小塩他, 2012) を、被害時の気分は 18 項目 5 件法の一時的気分尺度 (TMS) (徳田, 2011) を使用し、痴漢被害シナリオのような被害に遭ったと想定した上での気分として回答させた。対処行動の尺度は、研究代表者のこれまでの調査で実際に被害者が取っていた対処行動などから 16 項目 6 件法で作成した。

Figure 1

本調査の流れ



痴漢被害シナリオは痴漢被害時の条件として、「時間的余裕の有無」、「被害の程度」、「犯人の同定の可否」の 3 要因 2 水準とした。シナリオはこれまでの調査研究から典型的な電車内痴漢被害の内容をもとに作成した。実際のシナリオは「あなたは（仕事／一人でショッピング）に向かうため、家を出て電車に乗りました。電車は満員ではありませんでしたが、空いている席はなく、あなたは吊り革に掴まって立っていました。電車が駅を出てしばらくすると、お尻に手が触れる感覚がありました。初めは「当たってしまっただけかな」と思いましたが、その手がお尻から離れる様子はなく、しばらくすると（撫で回すように動き始めました／その手が下着の中にまで入ってきました）。あなたが後ろを振り返ると、後ろには（1 人の男性が立っており、その人物が犯人であることがわかりました／たくさんの人がいて、誰が犯人かわかりませんでした）」という内容であった。それぞれの条件が痴漢被害時の対処行動や被害後の通報行動、相談行動についての促進要因か抑制要因のいずれに該当するか、Table 2 にまとめて示す。

Table 2

各条件の促進要因・抑制要因

	時間の有無	被害の程度	犯人の同定の可否
促進 要因	あり 一人でショッピングに行く	重い 下着の中まで手が入ってきた	同定できた 後ろに男性が一人立っていた
抑制 要因	なし 仕事に向かう	軽い お尻を撫でまわされた	同定できなかった 人が多くて犯人がわからなかった

4. 結果

4-1. 対処行動尺度の因子分析

電車内痴漢被害時の対処行動尺度について因子分析を行った結果、「警察や駅員、相談機関への被害申告（通報相談因子）」、「被害時に犯行を中止させるために行う行動（直接対処因子）」、「被害時に自分を守ったりその場から離れたりする行動（防衛退避因子）」、「身近な人に被害について話す（打ち明け因子）」に分類された（Table 3）。

Table 3
対処行動尺度の因子分析結果

項目	通報相談	直接対処	退避防衛	打ち明け
2.警察署や交番に行って被害届を出す	0.911	0.005	-0.013	-0.038
1.警察に通報する	0.874	0.054	-0.005	-0.028
3.駅員に被害に遭ったことを伝える	0.768	0.067	0.030	0.009
16.相談室や相談窓口相談する	0.602	-0.046	0.069	0.079
14.犯人に向かって止めるように言う	0.019	0.817	-0.046	0.037
8.犯人の手を掴む	0.041	0.782	-0.059	-0.032
4.「痴漢です」「やめてください」などと大声を出す	0.251	0.611	-0.077	0.037
9.犯人の手を払い除ける	-0.108	0.589	0.347	-0.054
15.すぐに場所を移動する	0.037	-0.066	0.776	0.005
10.次の駅で車両を移る	0.108	-0.207	0.766	-0.021
13.持っている鞆でお尻を守る	-0.036	0.129	0.582	0.050
12.その場で体の向きを変える	-0.055	0.224	0.520	0.019
6.友人や家族などにその場で連絡して話す	0.018	-0.025	-0.018	0.877
7.会った時に友人や家族などに直接話す	-0.001	0.023	0.062	0.552
α 係数	0.881	0.821	0.761	0.670

4-2. 被害状況の要因による分散分析

4-2-1. 通報相談因子の分散分析

通報相談因子を目的変数とし、被害状況の3要因を説明変数とした分散分析を行った（Figure2~4）。その結果、時間の有無要因に有意差はなく（ $F(1, 3922)=1.646, p=n.s.$ ）、被害の程度要因（ $F(1, 3922)=33.613, p<.00, \eta_p^2=.008$ ）と犯人の同定要因（ $F(1, 3922)=9.026, p<.00, \eta_p^2=.002$ ）に有意差があった。また、時間の有無要因と犯人の同定要因の交互作用が有意であった（ $F(1, 3922)=4.271, p<.05, \eta_p^2=.001$ ）。

Figure 2

通報相談因子と時間の有無要因の分散分析

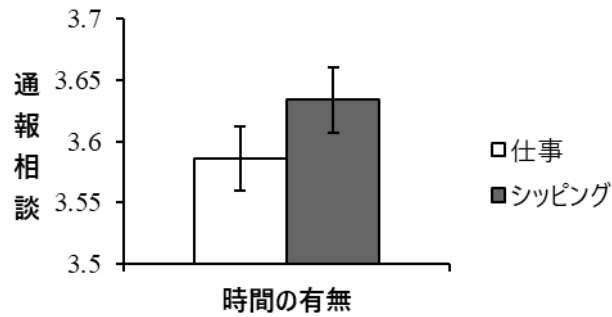


Figure 3

通報相談因子と被害の程度要因の分散分析

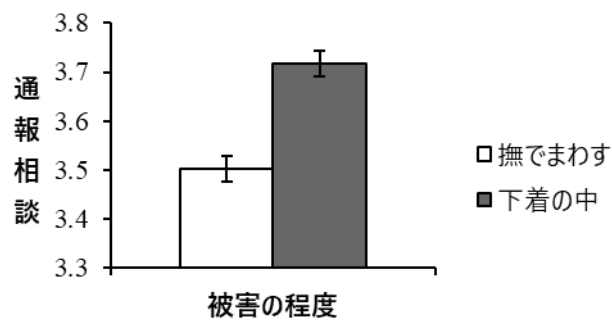
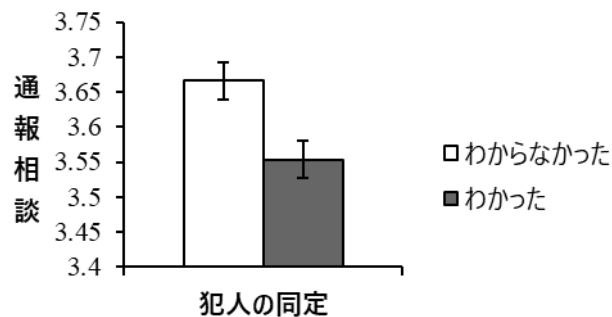


Figure 4

通報相談因子と犯人の同定の可否因子の分散分析



4-2-2. 直接対処因子の分散分析

直接対処因子を目的変数とし、被害状況の3要因を説明変数とした分散分析を行った (Figure 5~7)。その結果、時間の有無要因に有意傾向があり ($F(1, 3922)=3.480, p<.10, \eta_p^2=.001$)、被害の程度要因 ($F(1, 3922)=18.776, p<.00, \eta_p^2=.005$) があった。犯人の同

定要因 ($F(1, 3922) = 0.863, p = n.s.$) には有意差がなかった。

Figure 5

直接対処因子と時間の有無要因の分散分析

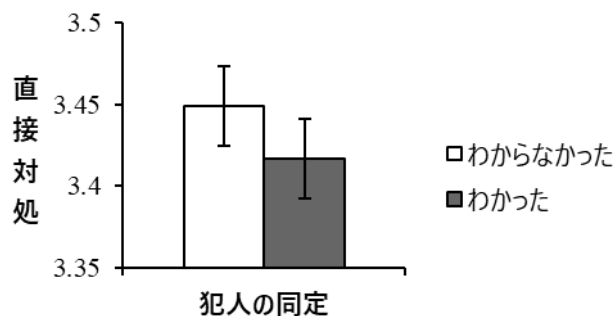


Figure 6

直接対処因子と被害の程度要因の分散分析

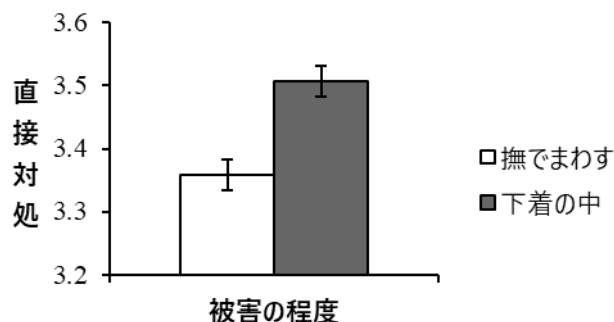
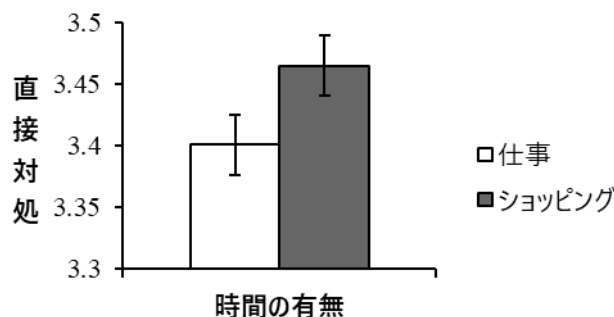


Figure 7

直接対処因子と犯人の同定の可否要因の分散分析



4-2-3. 退避防御因子の分散分析

退避防御因子を目的変数とし、被害状況の3要因を説明変数とした分散分析を行った (Figure 8~10)。その結果、時間の有無要因 ($F(1, 3922) = 1.603, p = n.s.$)、被害の程度要因 ($F(1, 3922) = 0.539, p = n.s.$) と犯人の同定要因 ($F(1, 3922) = 1.142, p = n.s.$) に有意

差はなかった。また、時間の有無要因と被害の程度要因の交互作用に有意傾向があり ($F(1, 3922)=3.204, p < .10, \eta^2 = .001$)、時間の有無要因と犯人の同定要因の交互作用が有意であった ($F(1, 3922)=7.476, p < .01, \eta^2 = .002$)。

Figure 8

退避防御子と時間の有無要因の分散分析

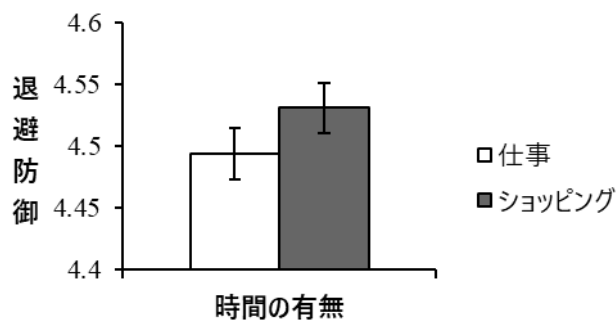


Figure 9

退避防御子と被害の程度要因の分散分析

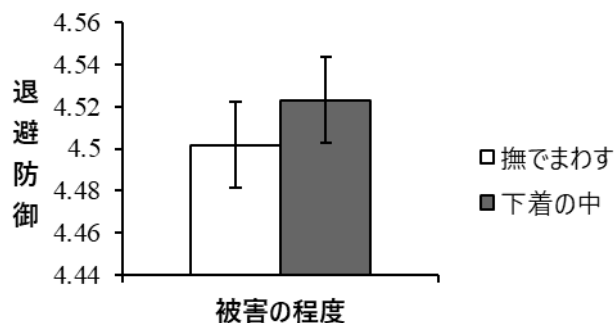
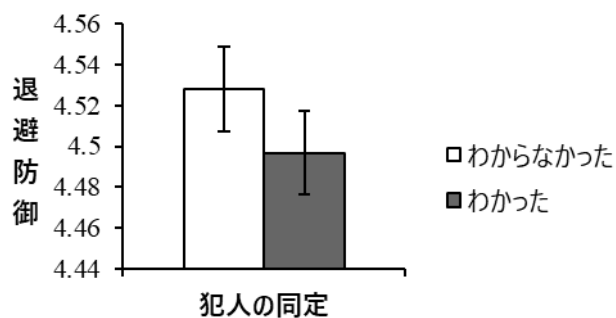


Figure 10

退避防御子と犯人の同定の可否要因の分散分析



4-2-4.打ち明け因子の分散分析

打ち明け因子を目的変数とし、被害状況の3要因を説明変数とした分散分析を行った (Figure 11~13)。その結果、時間の有無要因 ($F(1, 3922) = 1.304, p = n.s.$) と犯人の同定要因 ($F(1, 3922) = 2.548, p = n.s.$) に有意差はなく、被害の程度要因のみが有意傾向であった ($F(1, 3922) = 3.540, p < .10, \eta_p^2 = .001.$)。また、時間の有無要因と被害の程度要因と犯人の同定要因の交互作用に有意差があった ($F(1, 3922) = 3.994, p < .05, \eta_p^2 = .001.$)。

Figure 11

打ち明け因子と時間の有無要因の分散分析

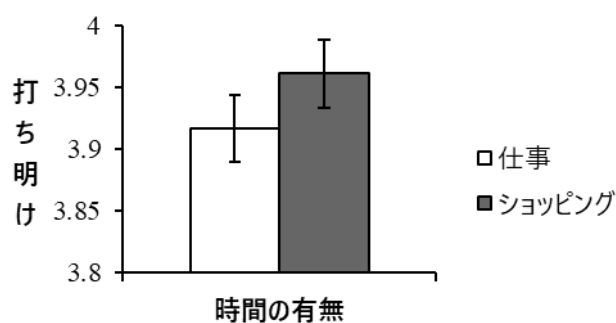


Figure 12

打ち明け因子と被害の程度要因の分散分析

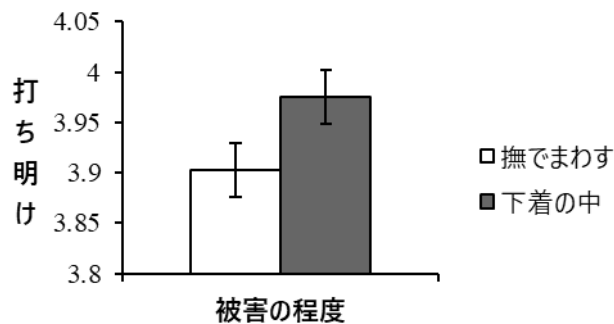
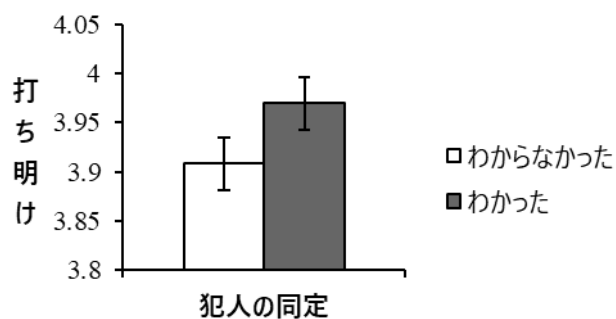


Figure 13

打ち明け因子と犯人の同定の可否要因の分散分析



4-3. シナリオ条件別の重回帰分析

各条件の参加者について、対処行動尺度の各因子得点を目的変数とし、年齢、Big5 の 5 因子、一時的気分尺度の 6 因子を説明変数とした階層的重回帰分析を行った。

4-3-1. 条件 A (時間的余裕なし/被害の程度重い/犯人の同定不可) の階層的重回帰分析

条件 A (仕事に向かう/撫でまわす/犯人わかった) の参加者について、対処行動尺度の各因子得点を目的変数とし、年齢、Big5 の 5 因子、一時的気分尺度の 6 因子を説明変数とした階層的重回帰分析を行った (Table 4~7)。

4-3-1-1. 通報相談因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「開放性」、一時的気分尺度の「怒り」と「活気」が正の関連を持っていた。

Table 4

条件 A の通報相談因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.020	-0.021	0.009
年齢	-0.001	0.001	0.000
外向性		-0.017	-0.054
協調性		-0.047	-0.026
勤勉性		0.030	0.035
神経症傾向		-0.029	-0.015
開放性		0.195 **	0.181 **
緊張			0.055
抑鬱			-0.038
怒り			0.154 *
混乱			-0.058
疲労			-0.011
活気			0.163 **
R^2	.000	.042 **	.070 **
ΔR^2		.042 **	.028 **
p 値	.928	.001	.022

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-1-2. 直接対処因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「開放性」が正の関連を、「協調性」と「神経症傾向」が負の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」と「活気」が正の関連、「抑鬱」と「混乱」が負の関連を持っていた。

Table 5

条件 A の直接対処因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.044	-0.054	-0.023
年齢	0.002	0.002	0.001
外向性		0.074	0.002
協調性		-0.110 *	-0.085 +
勤勉性		-0.009	0.005
神経症傾向		-0.131 **	-0.105 *
開放性		0.149 **	0.142 **
緊張			0.023
抑鬱			-0.153 *
怒り			0.334 **
混乱			-0.152 *
疲労			0.057
活気			0.143 **
R^2	.000	.070 **	.169 **
ΔR^2		.070 **	.099 **
p 値	.840	.000	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-1-3. 退避防御因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「勤勉性」と一時的気分尺度の「怒り」が正の関連を持っていた。

Table 6

条件 A の退避防御因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.314	0.348	0.405 +
年齢	-0.011	-0.012	-0.014 +
外向性		-0.055	-0.051
協調性		0.047	0.055
勤勉性		0.167 **	0.172 **
神経症傾向		0.072	0.019
開放性		0.057	0.067
緊張			0.033
抑鬱			0.098
怒り			0.146 *
混乱			-0.012
疲労			0.014
活気			-0.023
R^2	.004	.040 **	.092 **
ΔR^2		.036 **	.052 **
p 値	.149	.003	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-1-4. 打ち明け因子

Step1 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 の ΔR^2 値が有意であった。「年齢」が負の関連を持ち、Big5 の「外向性」因子が正の関連を持っていた。

Table 7

条件 A の打ち明け因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.715 **	0.780 **	0.807 **
年齢	-0.025 **	-0.027 **	-0.028 **
外向性		0.220 **	0.207 **
協調性		0.063	0.069
勤勉性		0.005	0.015
神経症傾向		0.072	0.061
開放性		0.081 +	0.080 +
緊張			0.061
抑鬱			-0.034
怒り			0.070
混乱			-0.039
疲労			0.042
活気			0.001
R^2	.022 **	.083 **	.093 **
ΔR^2		.062 *	.010
p 値	.001	.000	.492

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-2. 条件 B（時間的余裕なし/被害の程度軽い/犯人の同定不可）の階層的重回帰分析

条件 B（仕事に向かう/撫でまわす/犯人わからなかった）の参加者について、対処行動尺度の各因子得点を目的変数とし、年齢、Big5 の 5 因子、一時的気分尺度の 6 因子を説明変数とした階層的重回帰分析を行った（Table 8~11）。

4-3-2-1. 通報相談因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「開放性」因子が正の関連を、一時的気分尺度の「怒り」と「活気」が正の関連を持っていた。

Table 8

条件 B の通報相談因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.043	0.103	0.063
年齢	-0.001	-0.004	-0.002
外向性		0.082 +	0.059
協調性		-0.089 +	-0.068
勤勉性		0.053	0.054
神経症傾向		-0.003	0.006
開放性		0.113 *	0.097 *
緊張			0.038
抑鬱			-0.088
怒り			0.130 *
混乱			0.072
疲労			-0.005
活気			0.244 **
R^2	.000	.039 **	.084 **
ΔR^2		.039 **	.046 **
p 値	.838	.002	.001

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-2-2. 直接対処因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「開放性」が正の関連、「協調性」因子が負の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」と「活気」が正の関連を、「混乱」が負の関連を持っていた。

Table 9

条件 B の直接対処因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.302	0.379 +	0.393 +
年齢	-0.010	-0.013 +	-0.014 +
外向性		0.082 +	0.042
協調性		-0.134 **	-0.131 **
勤勉性		0.069	0.043
神経症傾向		-0.082 +	-0.061
開放性		0.168 **	0.156 **
緊張			-0.041
抑鬱			-0.032
怒り			0.246 **
混乱			-0.173 *
疲労			0.003
活気			0.149 **
R^2	.004	.089 **	.139 **
ΔR^2		.085 **	.050 **
p 値	.149	.000	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-2-3. 退避防御因子

Step3 において R^2 が有意であり、一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。

Table 10

条件 B の退避防御因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.212	0.225	0.186
年齢	-0.007	-0.008	-0.006
外向性		0.074	0.091 +
協調性		0.037	0.060
勤勉性		-0.007	0.011
神経症傾向		0.026	-0.006
開放性		0.071	0.076
緊張			-0.002
抑鬱			0.022
怒り			0.119 +
混乱			0.043
疲労			0.082
活気			-0.002
R^2	.002	.016	.057 **
ΔR^2		.014	.041 **
p 値	.311	.230	.002

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-2-4. 打ち明け因子

Step1 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。「年齢」が負の関連を、Big5 の「外向性」と「神経症傾向」が正の関連を持っていた。

Table 11

条件 B の打ち明け因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.641 **	0.684 **	0.692 **
年齢	-0.022 **	-0.024 **	-0.024 **
外向性		0.267 **	0.256 **
協調性		0.052	0.063
勤勉性		0.025	0.032
神経症傾向		0.153 **	0.137 **
開放性		0.009	0.002
緊張			0.164 **
抑鬱			-0.111 +
怒り			0.001
混乱			0.071
疲労			-0.027
活気			0.059
R^2	.019 **	.093 **	.118 **
ΔR^2		.074 **	.025 *
p 値	.002	.000	.036

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-3. 条件 C（時間的余裕なし/被害の程度重い/犯人の同定可）の階層的重回帰分析

条件 C（仕事に向かう/下着の中/犯人わかった）の参加者について、対処行動尺度の各因子得点を目的変数とし、年齢、Big5 の 5 因子、一時的気分尺度の 6 因子を説明変数とした階層的重回帰分析を行った（Table 12~15）。

4-3-3-1. 通報相談因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「勤勉性」が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」と「疲労」が正の関連を、「抑鬱」が負の関連を持っていた。

Table 12

条件 C の通報相談因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.082	-0.061	0.059
年齢	0.003	0.002	-0.002
外向性		0.134 **	0.093 +
協調性		-0.036	-0.007
勤勉性		0.095 *	0.106 *
神経症傾向		0.110 *	0.075
開放性		0.007	0.014
緊張			-0.035
抑鬱			-0.172 *
怒り			0.247 **
混乱			-0.022
疲労			0.166 **
活気			-0.026
R^2	.000	.034 **	.093 **
ΔR^2		.034	.059
p 値	.698	.005 **	.000 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-3-2. 直接対処因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「開放性」因子が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」と「疲労」が正の関連を、「抑鬱」と「混乱」が負の関連を持っていた。

Table 13

条件 C の直接対処因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.134	-0.143	0.095
年齢	0.005	0.005	-0.003
外向性		0.097 *	0.021
協調性		-0.051	0.008
勤勉性		0.017	0.028
神経症傾向		0.040	0.017
開放性		0.126 **	0.112 *
緊張			0.060
抑鬱			-0.235 **
怒り			0.376 **
混乱			-0.145 *
疲労			0.184 **
活気			0.066
R^2	.001	.037 **	.163 **
ΔR^2		.036 **	.126 **
p 値	.525	.003	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-3-3. 退避防御因子

Step1 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。「年齢」が正の関連を持ち、Big5 の「協調性」が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「抑鬱」が正の関連を持っていた。

Table 14

条件 C の退避防御因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.588 **	-0.577 **	-0.502 *
年齢	0.020 **	0.020 **	0.017 *
外向性		0.093 +	0.091 +
協調性		0.166 **	0.169 **
勤勉性		-0.015	-0.006
神経症傾向		0.009	-0.081 +
開放性		-0.047	-0.031
緊張			0.044
抑鬱			-0.002
怒り			0.178 **
混乱			0.049
疲労			0.079
活気			-0.069
R^2	.016 **	.048 **	.133 **
ΔR^2		.032 **	.085 **
p 値	.005	.006	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-3-4. 打ち明け因子

Step1 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 の ΔR^2 が有意であった。「年齢」が負の関連を持ち、Big5 の「外向性」と「協調性」が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」と「活気」が正の関連を持っていた。

Table 15

条件 C の打ち明け因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.628 **	0.654 **	0.684 **
年齢	-0.022 **	-0.023 **	-0.024 **
外向性		0.238 **	0.217 **
協調性		0.069	0.097 *
勤勉性		0.046	0.049
神経症傾向		0.039	0.029
開放性		0.011	0.000
緊張			0.059
抑鬱			-0.027
怒り			0.125 *
混乱			0.025
疲労			-0.007
活気			0.118 *
R^2	.018 **	.084 **	.103 **
ΔR^2		.066 **	.019
p 値	.003	.000	.115

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-4. 条件 D（時間的余裕なし/被害の程度重い/犯人の同定不可）の階層的重回帰分析

条件 D（仕事に向かう/下着の中/犯人わからなかった）の参加者について、対処行動尺度の各因子得点を目的変数とし、年齢、Big5 の 5 因子、一時的気分尺度の 6 因子を説明変数とした階層的重回帰分析を行った（Table16~19）。

4-3-4-1. 通報相談因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「開放性」と一時的気分尺度の「怒り」が正の関連を持っていた。

Table 16

条件 D の通報相談因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.081	-0.126	-0.068
年齢	0.003	0.004	0.002
外向性		0.046	0.052
協調性		0.010	0.020
勤勉性		0.069	0.066
神経症傾向		-0.029	-0.032
開放性		0.131 **	0.119 *
緊張			0.050
抑鬱			-0.026
怒り			0.159 *
混乱			0.003
疲労			-0.006
活気			0.063
R^2	.000	.035 **	.056 **
ΔR^2		.035 **	.021 *
p 値	.707	.004	.094

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-4-2. 直接対処因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」が正の関連を、「神経症傾向」が負の関連を持っていた。一時的気分尺度では「怒り」が正の関連を、「混乱」が負の関連を持っていた。

Table 17

条件 D の直接対処因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.182	0.130	0.261
年齢	-0.006	-0.004	-0.009
外向性		0.132 **	0.102 *
協調性		-0.059	-0.048
勤勉性		-0.035	-0.046
神経症傾向		-0.123 **	-0.103 *
開放性		0.107 *	0.091 +
緊張			0.044
抑鬱			-0.127 +
怒り			0.236 **
混乱			-0.210 **
疲労			0.091
活気			-0.011
R^2	.001	.066 **	.127 **
ΔR^2		.064 **	.062 **
p 値	.399	.000	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-4-3. 退避防御因子

Step3 において R^2 が有意であり、一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。一時的気分尺度の「緊張」と「怒り」とが正の関連を持っていた。

Table 18

条件 D の退避防御因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.169	0.186	0.350
年齢	-0.006	-0.006	-0.012 +
外向性		-0.001	0.009
協調性		0.062	0.053
勤勉性		0.054	0.055
神経症傾向		-0.025	-0.032
開放性		0.006	-0.007
緊張			0.128 *
抑鬱			-0.076
怒り			0.235 **
混乱			-0.093
疲労			0.026
活気			-0.071
R^2	.001	.012	.098 **
ΔR^2		.011	.086 **
p 値	.432	.370	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-4-4. 打ち明け因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」が正の関連を、「抑鬱」が負の関連を持っていた。

Table 19

条件 D の打ち明け因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.013	0.020	0.093
年齢	0.000	-0.001	-0.003
外向性		0.154 **	0.142 **
協調性		0.058	0.082 +
勤勉性		0.027	0.020
神経症傾向		0.049	0.057
開放性		0.090 +	0.069
緊張			0.027
抑鬱			-0.143 *
怒り			0.246 **
混乱			-0.030
疲労			0.069
活気			0.092
R^2	.000	.043 **	.086 **
ΔR^2		.043 **	.043 **
p 値	.953	.001	.001

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-5. 条件 E (時間的余裕あり/被害の程度軽い/犯人の同定可) の階層的重回帰分析

条件 E (一人でショッピングに向かう/撫でまわす/犯人わかった) の参加者について、対処行動尺度の各因子得点を目的変数とし、年齢、Big5 の 5 因子、一時的気分尺度の 6 因子を説明変数とした階層的重回帰分析を行った (Table 20~23)。

4-3-5-1. 通報相談因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」と「勤勉性」、一時的気分尺度の「怒り」と「活気」が正の関連を持っていた。

Table 20

条件 E の通報相談因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.028	0.129	0.128
年齢	0.001	-0.004	-0.004
外向性		0.139 **	0.125 *
協調性		-0.073	-0.055
勤勉性		0.112 *	0.112 *
神経症傾向		-0.026	-0.006
開放性		-0.034	-0.042
緊張			-0.094
抑鬱			0.068
怒り			0.176 **
混乱			0.020
疲労			-0.085
活気			0.175 **
R^2	.000	.041 **	.063 **
ΔR^2		.041 **	.021 +
p 値	.893	.001	.087

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-5-2. 直接対処因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」因子が正の関連を、「協調性」が負の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」と「活気」が正の関連を持っていた。

Table 21

条件 E の直接対処因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.116	0.276	0.306
年齢	-0.004	-0.009	-0.010
外向性		0.186 **	0.162 **
協調性		-0.131 **	-0.109 *
勤勉性		0.055	0.041
神経症傾向		-0.034	-0.020
開放性		0.046	0.038
緊張			-0.045
抑鬱			-0.130 +
怒り			0.253 **
混乱			-0.002
疲労			0.008
活気			0.127 *
R^2	.001	.071 **	.105 **
ΔR^2		.071 **	.033 **
p 値	.576	.000	.007

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-5-3. 退避防御因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」因子が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」が正の関連を持っていた。

Table 22

条件 E の退避防御因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.075	0.173	0.240
年齢	-0.003	-0.006	-0.008
外向性		0.116 *	0.123 *
協調性		0.093 *	0.081 +
勤勉性		0.060	0.054
神経症傾向		-0.013	-0.054
開放性		-0.068	-0.033
緊張			0.077
抑鬱			0.074
怒り			0.160 *
混乱			-0.101
疲労			-0.007
活気			-0.045
R^2	.000	.028 *	.083 **
ΔR^2		.028 *	.055 **
p 値	.715	.017	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-5-4. 打ち明け因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」因子が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「活気」が正の関連を持っていた。

Table 23

条件 E の打ち明け因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.030	0.138	0.155
年齢	-0.001	-0.005	-0.005
外向性		0.248 **	0.244 **
協調性		0.046	0.049
勤勉性		-0.016	-0.017
神経症傾向		0.042	0.030
開放性		0.041	0.043
緊張			0.116 +
抑鬱			-0.065
怒り			0.078
混乱			0.085
疲労			-0.057
活気			0.136 *
R^2	.000	.064 **	.088 **
ΔR^2		.064 **	.025 *
p 値	.883	.000	.043

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-6. 条件 F（時間的余裕あり/被害の程度軽い/犯人の同定不可）の階層的重回帰分析

条件 F（一人でショッピングに向かう/撫でまわす/犯人わからなかった）の参加者について、対処行動尺度の各因子得点を目的変数とし、年齢、Big5 の 5 因子、一時的気分尺度の 6 因子を説明変数とした階層的重回帰分析を行った（Table 24~27）。

4-3-6-1. 通報相談因子

Step1 が有意傾向、Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。一時的気分尺度の「抑鬱」と「怒り」と「活気」が正の関連を持っていた。

Table 24

条件 F の通報相談因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.384 +	-0.400 +	-0.377 +
年齢	0.013 +	0.014 +	0.013 +
外向性		0.097 *	0.081 +
協調性		-0.013	-0.013
勤勉性		0.074	0.063
神経症傾向		-0.025	-0.048
開放性		0.035	-0.009
緊張			0.027
抑鬱			0.155 *
怒り			0.184 **
混乱			-0.044
疲労			-0.112 +
活気			0.233 **
R^2	.007 +	.032 *	.082 **
ΔR^2		.025 *	.050 **
p 値	.065	.028	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-6-2. 直接対処因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「神経症傾向」が負の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」と「活気」が正の関連、「混乱」が負の関連を持っていた。

Table 25

条件 F の直接対処因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.230	-0.221	-0.106
年齢	0.008	0.008	0.004
外向性		0.078	0.067
協調性		-0.097 *	-0.086 +
勤勉性		-0.010	-0.018
神経症傾向		-0.159 **	-0.128 **
開放性		0.097 *	0.037
緊張			-0.035
抑鬱			-0.071
怒り			0.336 **
混乱			-0.135 *
疲労			0.030
活気			0.194 **
R^2	.002	.066 **	.138 **
ΔR^2		.063 **	.072 **
p 値	.270	.000	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-6-3. 退避防御因子

Step3 において R^2 が有意であり、一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。一時的気分尺度の「抑鬱」と「怒り」が正の関連を持っていた。

Table 26

条件 F の退避防御因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.221	0.171	0.153
年齢	-0.008	-0.006	-0.005
外向性		-0.039	-0.013
協調性		0.091 +	0.070
勤勉性		-0.003	-0.004
神経症傾向		0.004	-0.073
開放性		0.034	-0.001
緊張			-0.032
抑鬱			0.175 **
怒り			0.253 **
混乱			-0.085
疲労			0.058
活気			-0.018
R^2	.002	.012	.125 **
ΔR^2		.010	.112
p 値	.288	.414	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-6-4. 打ち明け因子

打ち明け因子を目的変数として階層的重回帰分析を行った結果、Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」と「活気」が正の関連を持っていた。

Table 27

条件 F の打ち明け因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.145	0.097	0.151
年齢	-0.005	-0.003	-0.005
外向性		0.209 **	0.197 **
協調性		0.066	0.076
勤勉性		0.051	0.040
神経症傾向		0.102 *	0.081
開放性		0.048	0.010
緊張			0.043
抑鬱			-0.029
怒り			0.225 **
混乱			0.019
疲労			0.022
活気			0.190 **
R^2	.001	.058 **	.104 **
ΔR^2		.057 **	.046 **
p 値	.487	.000	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-7. 条件 G (時間的余裕あり/被害の程度思い/犯人の同定可) の階層的重回帰分析

条件 G (一人でショッピングに向かう/下着の中/犯人わかった) の参加者について、対処行動尺度の各因子得点を目的変数とし、年齢、Big5 の 5 因子、一時的気分尺度の 6 因子を説明変数とした階層的重回帰分析を行った (Table 28~31)。

4-3-7-1. 通報相談因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」と「開放性」が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」と「活気」が正の関連を持っていた。

Table 28

条件 G の通報相談因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.239	-0.258	-0.228
年齢	0.008	0.009	0.008
外向性		0.103 *	0.099 *
協調性		-0.008	0.008
勤勉性		0.022	0.033
神経症傾向		0.069	0.061
開放性		0.166 **	0.167 **
緊張			-0.046
抑鬱			0.099
怒り			0.210 **
混乱			-0.027
疲労			-0.009
活気			0.113 *
R^2	.003	.050 **	.085 **
ΔR^2		.047 **	.035 **
p 値	.254	.000	.005

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-7-2. 直接対処因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」が正の関連を、「混乱」が負の関連を持っていた。

Table 29

条件 F の直接対処因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.061	-0.041	0.039
年齢	0.002	0.001	-0.001
外向性		0.128 **	0.099 *
協調性		-0.017	0.006
勤勉性		0.057	0.068
神経症傾向		0.002	-0.006
開放性		0.082 +	0.072
緊張			0.060
抑鬱			0.009
怒り			0.339 **
混乱			-0.152 *
疲労			-0.004
活気			0.086
R^2	.000	.040 **	.136 **
ΔR^2		.040 **	.096 **
p 値	.771	.001	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-7-3. 退避防御因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「協調性」と「神経症傾向」が正の関連を、「外向性」が有意傾向で負の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」が正の関連を持っていた。

Table 30

条件 G の退避防御因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.168	0.207	0.230
年齢	-0.006	-0.007	-0.008
外向性		-0.087 +	-0.081 +
協調性		0.143 **	0.153 **
勤勉性		0.083 +	0.098 *
神経症傾向		0.166 **	0.127 *
開放性		-0.019	-0.017
緊張			0.061
抑鬱			0.053
怒り			0.176 **
混乱			-0.022
疲労			0.077
活気			0.002
R^2	.001	.051 **	.119 **
ΔR^2		.049 **	.069 **
p 値	.423	.000	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-7-4. 打ち明け因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」と「協調性」と「神経症傾向」が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」が正の関連を、「活気」が有意傾向で正の関連を持っていた。

Table 31

条件 G の打ち明け因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.106	0.097	0.097
年齢	-0.004	-0.003	-0.003
外向性		0.218 **	0.205 **
協調性		0.087 +	0.108 *
勤勉性		-0.036	-0.029
神経症傾向		0.194 **	0.183 **
開放性		0.157 **	0.140 **
緊張			0.041
抑鬱			-0.074
怒り			0.173 **
混乱			0.014
疲労			0.049
活気			0.099 +
R^2	.001	.094 **	.122 **
ΔR^2		.093 **	.028 *
p 値	.615	.000	.017

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-8. 条件 H (時間的余裕あり/被害の程度思い/犯人の同定不可) の階層的重回帰分析

条件 H (一人でショッピングに向かう/下着の中/犯人わからなかった) の参加者について、対処行動尺度の各因子得点を目的変数とし、年齢、Big5 の 5 因子、一時的気分尺度の 6 因子を説明変数とした階層的重回帰分析を行った (Table 32~35)。

4-3-8-1. 通報相談因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」と一時的気分尺度の「怒り」が正の関連を持っていた。

Table 32

条件 H の通報相談因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.075	0.011	-0.022
年齢	0.003	0.000	0.001
外向性		0.127 *	0.112 *
協調性		-0.054	-0.036
勤勉性		0.042	0.058
神経症傾向		0.011	0.015
開放性		0.044	0.022
緊張			-0.042
抑鬱			0.034
怒り			0.234 **
混乱			0.047
疲労			-0.060
活気			0.187 **
R^2	.000	.030 *	.067 **
ΔR^2		.029 *	.038 **
p 値	.721	.012	.004

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-8-2. 直接対処因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「外向性」が正の関連を、「神経症傾向」が負の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」と「疲労」と「活気」が正の関連を持っていた。

Table 33

条件 H の直接対処因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	-0.114	0.024	0.048
年齢	0.004	-0.001	-0.002
外向性		0.190 **	0.170 **
協調性		-0.047	0.002
勤勉性		0.032	0.022
神経症傾向		-0.105 *	-0.092 *
開放性		0.069	0.036
緊張			0.016
抑鬱			-0.080
怒り			0.320 **
混乱			-0.234 **
疲労			0.139 *
活気			0.136 *
R^2	.001	.080 **	.168 **
ΔR^2		.079 **	.088 **
p 値	.585	.000	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-8-3. 退避防御因子

Step3 において R^2 が有意であり、一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。Big5 の「協調性」が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「抑鬱」が正の関連を持っていた。

Table 34

条件 H の退避防御因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.146	0.083	0.164
年齢	-0.005	-0.003	-0.006
外向性		-0.040	-0.024
協調性		0.127 **	0.131 **
勤勉性		0.035	0.034
神経症傾向		-0.004	-0.041
開放性		0.041	0.045
緊張			0.047
抑鬱			0.192 **
怒り			0.054
混乱			-0.126 +
疲労			0.106 +
活気			-0.028
R^2	.001	.023 +	.088 **
ΔR^2		.022 +	.065 **
p 値	.487	.055	.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4-3-8-4. 打ち明け因子

Step2 から Step3 にかけて R^2 が有意であり、Big5 を投入した Step2 の ΔR^2 値と一時的気分尺度を投入した Step3 の ΔR^2 が有意であった。「年齢」が負の関連を、Big5 の「外向性」と「協調性」と「神経症傾向」が正の関連を持ち、一時的気分尺度の「怒り」が正の関連を持っていた。

Table 35

条件 H の打ち明け因子の階層的重回帰分析

変数名	Step1	Step2	Step3
切片	0.382 +	0.410 *	0.430 *
年齢	-0.013 +	-0.014 *	-0.015 *
外向性		0.230 **	0.223 **
協調性		0.139 **	0.136 **
勤勉性		0.071	0.087 +
神経症傾向		0.160 **	0.149 **
開放性		0.033	0.029
緊張			0.009
抑鬱			-0.089
怒り			0.148 *
混乱			0.057
疲労			0.078
活気			0.046
R^2	.007 +	.093 **	.121 **
ΔR^2		.086 **	.028 **
p 値	.068	.000	.020

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

5. 考察

5-1. 通報相談因子について

通報相談因子について、シナリオの条件では被害の程度要因と犯人の同定要因に有意差があり、被害の程度が重い場合、犯人が分かった場合に通報や相談の行動が増えることが示唆された。犯人の同定要因については、先行研究において通報をしなかった理由として挙げられていた「誰がやったかはっきりしなかったから」「犯人が捕まらないと思うから」といった理由により通報行動を抑制していることを支持するものであり、被害の程度要因については、「大したことではなかったから」という理由で通報しないという調査結果を支持するものである。一方で、先行研究で通報しない理由として挙げられ

ていた「時間がなかったから（遅刻など）」といった理由については、痴漢被害に遭った際の通報相談行動に影響しないことが示唆された。先行調査において、通報しない理由は複数回答可である調査が多く、回答者が通報をしなかったことの合理的理由として選択した可能性が示唆される。

Big5 については外向性や開放性、被害時の気分については怒りや活気が高い方が通報相談行動をとりやすいことが示唆された。誰かに話す行為であるため外向性や開放性が関わり、犯人を捕まえるためのアクションであることから、怒りが高い方が行動医師が高められ、その意思が活気をも高めている可能性が考えられる。

5-2. 直接対処因子について

直接対処因子について、シナリオの条件では被害の程度要因に有意差があり、被害の程度が重い場合に直接的な対処行動をとりやすいことが示唆された。被害の内容が重篤でない場合には我慢をする被害者が多く、被害がエスカレートした際に我慢ができず対処行動に出る場合が多いことが推察される。Big5 については神経症傾向や協調性が負の関連を持っているシナリオが多く、被害時の気分としては怒りや活気が直接的な対処行動を促進し、混乱が対処行動を抑制している可能性が示唆された。怒りの行動促進効果については、大高 (2017) の示唆を支持する結果となった。

5-3. 退避防御因子について

退避防御因子については、通報やその場での直接的な対処と比較すると行動のハードルが低く、天井効果もあるためかシナリオの条件による分散分析では有意な主効果の要因はなかった。Big5 についてはいずれのシナリオでも一貫して関連している因子が少なく、被害時の気分としては怒りを感じるほど退避防御行動が促進されることが示唆された。怒りの行動促進効果については、大高 (2017) の示唆を支持する結果となった。

5-4. 打ち明け因子について

打ち明け因子については、シナリオの条件による分散分析で有意な主効果のある要因はなかった。Big5 についてはいずれのシナリオでも一貫して外向性が正の関連を持っており、通報相談因子と同様に、身近な人に話す行為であるため、外向性の高さが打ち明け行動を促進するものと考えられる。

5-5. 総合考察

今回の調査で使用した電車内痴漢被害時の対処行動尺度は、通報相談因子、直接対処因子、退避防御因子、打ち明け因子に分類された。このうち、通報相談因子は被害を申告して犯人を捕まえるための行動であり、退避防御因子は犯人を捕まえることよりも痴漢行為から逃れるために行う行動である。確実に犯人を捕まえようと思うならば、犯人

の確かな同定とその証拠確保が重要となる。城 (2019) では、平成 28 年中に東京地検に公判請求された電車内での痴漢事件について、その争点をまとめている。それによると、ほとんどの事件では被害者が痴漢被害に遭ったことには争いが無いが、被疑者が犯人であるか、被害者が犯人を取り違えた可能性がないかが争点となっている。具体的には、目撃者の証言と被害者の証言に矛盾がない場合、スマートフォンで触られている動画や加害者の写真を撮影していた場合など、客観的証拠がある事件や、実際に触られている間に犯人の手を掴んだ事件において、被害者が犯人を取り違えた可能性が否定されている。退避防御の行動をとった場合には、犯人が再び痴漢行為をしない限り、犯人を取り違えず確保することは難しくなる。痴漢被害に遭った際、もしくは痴漢被害がなかなか止まなかったりエスカレートしたりした際に、必ずしもすべての被害者が犯人を捕まえて罰してほしいと考えるわけではなく、「多少我慢してでも犯人を捕まえたい」と思うか、「犯人を捕まえなくてもいいから痴漢行為をやめてほしい」と思うかによって、とるべき対処行動も異なってくると考えられる。

5-6. 今後の展望

本調査では、参加者の被害経験についてもスクリーニング時に聴取している。被害経験の有無や被害経験の回数も被害時の対処行動や被害後の通報相談行動に影響している可能性が考えられ、追加の分析を行う予定である。

本研究の当初の目的としては、電車内痴漢被害時の通報行動やその場での対処行動に関する研究成果を社会に還元していくにあたり、どのようなサービスがあるとよいか、効果的な広報活動は何かについても検討する予定であった。これらについてはまず、総合考察において述べた「多少我慢してでも犯人を捕まえたい」と思うか、「犯人を捕まえなくてもいいから痴漢行為をやめてほしい」と思うかの両方について、適切な対処行動を整理したうえで検討する必要がある。また、痴漢被害に「遭わないための対策行動」についても調査研究を進めたうえで、対策行動と対処行動の両方を啓蒙するためのものを考案したい。

6. 引用文献

浅野 敬子・小西 聖子・中島 聡美 (2011). 痴漢被害の援助要請志向に影響を与える要因の検討 武蔵野大学心理臨床センター紀要, 11, 1-11.

警察庁 (2011). 電車内の痴漢撲滅に向けた取組みに関する報告書

<https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/h22_chikan_kenkyukai.pdf>

警視庁 (2024). 安全な暮らし 被害にあわないために 痴漢等の性犯罪防止 痴漢等の性犯罪防止対策 警視庁ホームページ

<<https://www.keishicho.metro.tokyo.lg.jp/kurashi/higai/koramu2/koramu8.html>>

(September 27th 2024)

- 京都府警察 (2015). 京都府警察犯罪抑止対策調査研究会 (性犯罪対策研究部会) 報告書
～ 性 犯 罪 の 現 状 を 踏 ま え て ～
<<http://202.34.14.131/fukei/enzen/seitai/tokumei/documents/houkoku2803.pdf>>
- 小塩 真司・阿部 晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory
(TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21, 40-52.
- 大高 実奈 (2017). 男女大学生における電車内痴漢被害の実態調査 東洋大学大学院紀
要, 54, 65-76.
- 埼玉県警察 (2020). 女性を対象とした犯罪 (痴漢等) に関するアンケート調査結果《概
要編》 <<https://www.police.pref.saitama.lg.jp/documents/16870/zyosei1.pdf>>
- 城 祐一郎 (2019). 近時における公共交通機関等での痴漢事件の実証的研究—平成 28
年中の東京地検による公判請求事件の分析と検討— 警察学論集, 72, 37-110.
- 東京都 (2023). 令和 5 年度 痴漢被害実態調査 報告書
<https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/0000002189/R5chikan_report.pdf>
- 清水 裕二 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究
実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 鈴木 眞悟 (2000). 若年女性における痴漢被害の実態 科学警 察研究所報告 防犯少年
編, 40, 137-145.
- 徳田 完二 (2011). 一時的気分尺度 (TMS) の妥当性 立命館人間科学研究, 22, 1-6.